

## 前諏訪中央病院歯科口腔外科

### 歯に関するよもやま話

### おおくぼ ひろき 大久保博基 歯科医師



歯を抜くとき、痛みがないように麻酔をします。しかし

今から約170年前までは麻酔薬がなかったため(正確には、麻酔の効能をもつ薬品は大昔からありましたが、外科手術のために使われることはありませんでした)、人々は耐え難い苦痛の中で歯を抜かれていました。左の写真は、近代前期の抜歯の様子ですが、決して大げさでもコミカルでもありません。悲鳴やうめき声は、

いたる所であがっていました。

1844年、アメリカ合衆国の歯科医師ホールズ・ウエルズが、亜酸化窒素というガスで吸入麻酔を行い、友人の親知らずを抜きました。彼はその後、数人の患者に同じように麻酔をかけて歯を抜きましたが、すべてうまくいったわけではありませんでした。



1846年、同じくアメリカのマサチューセッツ総合病院で、ウエルズと同僚歯科医師ウィリアム・T・G・モートンが、ジエチルエーテルというガスによる公開麻酔を成功させ、麻酔の有効性が広く認められるようになりました。このときの手術室は、最初の外科麻酔の公開実験の記念物として今も残され、エーテ

ルドーム(ether dome)と呼ばれています。近代麻酔の創世紀には麻酔の研究にウエルズ、モートンをはじめ多くの歯科医師たちが携わっていました。いかに歯の治療が苦痛に満ち、歯科医にとって麻酔が求められていたかおわかりでしょう。

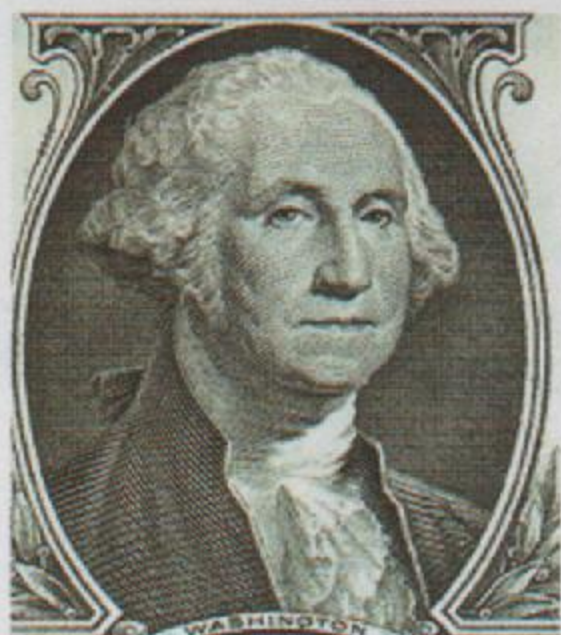
この当時歯科医師たちが、いかに痛みなく抜歯をしようと腐心していたか、想像してみてください。

我が国ではモートンの公開麻酔から9年後の1855年(安政2年)、杉田成郷(解体新書で知られる杉田玄白の孫)によってエーテル麻酔による乳がん手術が行われました。全身麻酔下での乳がん手術は、1804年に紀州(今の和歌山県)の開業医・華岡青洲が成功させています。実はこれ

が世界初の全身麻酔による外科手術なのです(詳しくは有吉佐和子著「華岡青洲の妻」をお読みください)。

先人の苦勞により現在では、ほとんどの抜歯を含む歯の治療は、全身麻酔ではなく局所麻酔で十分快適に受けられます。歯の治療は痛い、恐ろしいというイメージはすでに過去のものですので、安心して歯科医院を受診してください。

ところで、次の写真はご存じ1ドル札のジョージワシントン(アメリカ合衆国初代大統領)ですが、彼はその人生を通



して歯の問題に悩まされ続けました。大統領に就任したのが1789年ですから、耐え難い苦痛の中で歯を抜かれたのかもしれない。写真のワシントンは総入れ歯です。当時の入れ歯はカバや象の牙を削って作られ、金のバネでおさえるしくみで、常にかみしめていないと歯が飛び出てしまうものでした。紙幣の彼の口元は、歯を飛び出させまいと緊張しています。就任中に描かれた多くの肖像画も同様です。「演説なんてとんでもない、大統領3期目なんてムリ」と、彼が側近にそう言ったか定かではありませんが、第二次大戦後の1951年の合衆国憲法改正により、通算3期目の大統領はできなくなりました。